

Title	アンドレ・ジイド作品における声の権力
Sub Title	Le Pouvoir des voix chez André Gide
Author	森, 香織(Mori, Kaori)
Publisher	慶應義塾大学フランス文学研究室
Publication year	2015
Jtitle	Cahiers d'études françaises Université Keio (慶應義塾大学フランス文学研究室紀要). Vol.20, (2015.) ,p.1- 16
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11413507-20151201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アンドレ・ジイド作品における声の権力

森 香織

1. 序

アンドレ・ジイドにとって、他者という存在は、その自我のあり方を大きく動揺させるものであり、自己を「真実の姿」と信じている姿から逸脱した非・自己へと還元する力を持つものであった¹。しかしジイドは、その様な他者の存在に対し、不満を漏らすと同時に、他者に阿ろうとする自分にも意識的であり²、他者との協調を模索しなければならないとも考えていた³。更に、ジイドは自身の日記の中で、繰り返し語りたいと思う主題は、「人間が正真正銘の自分になるのを妨げるもの」との「全存在を挙げての闘争」であるとしている⁴。こうした事実を踏まえた上でその作品を見直してみると、それらは、他者という存在によって、「正真正銘の自分」や、そうありたいと願う自己の姿から疎外された登場人物達が、それを回復する為の闘争を繰り返している場であることがわかる。本論では、そうした他者に対して自己に都合のいいイメージを押し付けようとする登場人物と、それに抵抗する登場人物との間の闘争、(自己／他者に対するイメージ支配を巡る闘争)の様相を記述し、そこに透けて見えるジイドの人間観や世界観を浮き彫りにすることである。

さて、そうした闘争においては、見る、話す、書くという様々な行為が、

¹ 1891年10月8日の日記(t. I, pp. 143-144) や、1930年3月21日の日記 (t. II, pp. 192-193) を参照のこと。

² 1891年6月10日(t. I, pp. 129-132) の日記を参照のこと。

³ 例えば1893年9月13日(t. I, pp. 173-174) の日記にそうした記述が見られる。

⁴ 1930年7月3日の日記(t. II, p. 213) より引用。

登場人物間のイマージュの調整や再構築の為の道具、更には他者への支配力を付与する道具として寄与している。本論では、その中から特に、「話す」という行為に着目し、それに伴う「声」がいかに関争に寄与しているかを論じる。というのも、凡そ人間のする行為の中で、「話す」という行為程に他者と自己の問題に直結するものはない。何故なら、そもそも「言葉」自体が、ある対象に対して他者と認識を共有するための道具であり、「話す」という行為も、他者へ何らかの情報を伝える為に存在する行為だからである。つまり、「言葉」も、「話す」という行為も、他者の存在がなければ成立しない。（仮に「完全に内的な言語」が存在するとして、それを規定するためには必ず「外的な言語」つまり、他者の存在を要請するはずである。）また、「話す」という行為に伴う「声」についても、それ自体が自己と他者の交錯する場であるということができる。何故なら、「私の声」は、「私」のものであると同時に「私」の外部に存在し、完全に「私」ではないからだ。録音された自分の声を自分のものと認識することが、自らのエクリチュールを自分のものとして認識するよりも困難であることは、「声」の非・自己的性質を端的に表しているだろう。更には、話される言葉に伴う「意味」*«Bedeutung»*の前表現的、前言語的実在を前提としたフッサールの考え方をすれば、言述とは、内部に存在する意味が「外部」に刻み付けられる行為＝「表現」*«expression»*、または「表出＝外化」*«extériorisation»*である⁵わけだが、デリダが指摘したように⁶、その「外部」が意識という自己の「内部」から完全に抜け出すことができないのではないかという問題がある。要するに、「話す」という行為、もしくはそれに伴う「声」や、そこで使われる「言語」には必ず自己／他者の問題が付きまとう。また、「話す」という行為が、他者との権力闘争の道具となりえることは、ブルデューの論にその根拠を求めることができる。ブルデューは、言語的交換（言葉のやり取り）は、象徴的権力の錯綜した連環の束であり、発話者や発話者集団相互に、各々の力関係 *«rapports*

⁵ エトムント・フッサール、『論理学研究 2』、立松弘孝訳、みすず書房、1970年。

⁶ ジャック・デリダ、『声と現象』、林好雄訳、ちくま学芸文庫、2014年。

de force » を発現するものであり、発話者は、彼の属する言語場の代弁者 « porte-parole » として、その市場全体の価値を救うべく発言するとしている⁷。そうであるならば、意図的に「話す」という行為を用いて、他者との力関係を操作することも可能である。

尚、「話す」行為のなかで、「顔」を見て話す、即ち「対話」を巡る登場人物間の闘争の様子については、既に拙稿⁸で論じてある。よって本論では、「話す」という行為をする際に、相手の「顔」を見るよりも、自分または相手の「声」を聞くことが重要なテーマとなっている場面に焦点を絞る。それは即ち、朗読、及び演説の場面である。第一項ではまず、一対一で行われる朗読の場面から見ていくことにし、その代表例として、『アンドレ・ワルテルの手記』（以下『手記』）のワルテルとエマニュエルの間で行われる朗読を取り上げる。

2. 一対一で行われる朗読

ジイド作品において、親密な二人の男女が同じ書物を読む場面は多く存在するが、その中でも朗読という行為には、非常に重要な意味がある。『手記』のうち、「白い手記」は、エマニュエルと T...氏との結婚に打ちひしがれたワルテルが、「思念を昔の夢想から解き放ち」、「新しい生を生きるため」(p.8)の準備として、書き溜めた文章を全て書き写したものであるが、これを読めば、以前、ワルテルとエマニュエルの間では、非常に多くの朗読がなされていたことがわかる。ここでまず注目しなければならないのは、その朗読の仕方である。この行為は、常にワルテルからエマニュエルに向けての一方通行でしか行われぬ。その事実も、もし、「朗読」、もしくは「声」に何かしらの影響力や権力が期待されるのであれば、常に相手に影響を与えよう、もしくは支配権を揮おうとしているのは、ワルテルのみであり、エマニュエルに

⁷ Pierre Bourdieu, *Ce que parler veut dire : L'économie des échanges linguistiques*, Fayard, Paris, 1982.

⁸ 森 香織、「アンドレ・ジイドにおける『顔』を」めぐる闘争」、『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要第18号』、2013年、pp.17-32.

関しては、その行為が行われる限りは、その力を受容していることを示している。

さて、その「朗読」や「声」の力は、確かにワルテルによって信じられている。彼は彼らの間で成される朗読の様子を次のように書いている。

«*J'ai vu le Sphinx qui s'enfuyait du côté de la Libye ; il galopait comme un chacal.*⁹»

Je le déclamais à très haute voix en en développant tout d'abord l'étendue, puis en faisant saillir, sitôt après, le dactyle ; et nous frémissions tous les deux aux bondissements superbes de la phrase. (p. 10)

ここでは、朗読の際に、ジェロームが音域の広がりや長短短格 « da-ctyle » を際立たせることに注意を払っていること、即ち、朗読の際の音楽性の探求に注目しなければならない。(しかも、朗読の対象も、ホメロスやヴィニ一、ボードレール、フローベールの詩という、音楽性の高い書物である。)音楽¹⁰といえ、『手記』自体が「音楽的言語」の創造過程であると W. ゲールツは指摘している¹¹が、J. M. ヴィットマンは更に、『手記』が「音楽的エクリチュール」の創造を目指すのは、ワルテルにとって音楽が、エマニ

⁹ フローベールの『聖アントワヌの誘惑』からの引用。

¹⁰ ジイドが「音楽」という時の「音楽」とは、ショパンに代表されるような「最も純粋な音楽」である。それは、華美な超絶技巧や過度なパトスを排した、静謐で、躊躇いがちに展開する音楽、音楽的靈感によって書かれた音楽であり、そうした音楽は、しばしば「動揺」、「囁き」「不確実さ」という言葉と共に語られる。この、そうした小さな震え、揺れ動くイメージを持つ音楽だけが、人の心を揺さぶり感動させる力を持つとジイドは考えている。(こうしたジイドの音楽観については、André Gide, *Notes sur Chopin*, Gallimard, 2010.を参照のこと。)

¹¹ Walter Geerts, *Le silence sonore – la poétique du premier Gide entre intertexte et métatexte*, presses universitaires de Namur, 2002, *passim*.

ュエルとの靈的交流・魂の混合を実現する媒体であるからだとしている¹²。実際、『手記』の中には、魂の混合が可能であった在りし日のエマニュエルを再び揺り起こそうと努めるワルテルが、ピアノを弾くことによって、エマニュエルの魂に揺さぶりをかける場面がある。(p. 43) つまり、音楽（特にピアノを弾くという行為）は、ワルテルによって、共に魂の合一が可能な自分の分身、かつ純潔と愛情の象徴であるエマニュエル、という理想のエマニュエル像の中に彼女を還元し、イマージュ支配の闘争において彼女に対して権力を振るい得る道具として、使用されている。ならば、「朗読」という「声」（＝音）を伴う行為、しかもその対象と調子によってさらに音楽性を加えられた「朗読」という行為も、ワルテルにとっては、黙読よりもエマニュエルに対して大きな影響力、更には彼女のイマージュ支配を可能にする力を持ちえる道具と考えられていると言えるだろう。

では、音楽を奏する、もしくは聴くという行為だけでなく、それに加えて多量の朗読が行われたのはなぜなのか。音楽と朗読を区別するものとは何なのか。無論「言葉」の存在である。しかしここで問題になるのは、万人共通の意味を持つ伝達の手段としての言葉ではない。ワルテルとエマニュエルの間で交わされる「言葉」について、ワルテルは以下の様に書いている。

Nous aimions à nous perdre ensemble en les plus lointains souvenir ; par des associations ténues, par-dessus le temps et l'espace, par des rapports inattendus, un mot suffisait à lever tant de rêves. Car ce n'était pas le mot seul ; pour nous, il avait sa légende et la même ; il évoquait bien des émois passés, des lectures, et quand nous l'avions dit, et quand nous l'avions lu : — ce n'était jamais le mot seul, c'était un rappel d'autrefois. [...]

Puis un mot bien souvent voulait dire une phrase, connue de nous seuls, entendue par nous seuls, — ce n'était qu'un mot pour les autres. Un mot c'était un commencement de vers, ou de pensée : l'autre achevait. (p. 32)

二人の間で交わされる言葉は、二人に共通の「過去の喚起」« rappel

¹² Jean-Michel Wittemann, *Symboliste et déserteur : les œuvres "Fin de siècle" d'André Gide*, H. Champion, Paris, 1997, *passim*.

d'autrefois」であり、その単語には、二人の間でしか共有されることのない秘密の意味が付与されている¹³。即ち、二人の間で「言葉」が交わすという行為は、互いにとって互いが特権的な存在であることを相手に知らしめ、二人だけの親密な空間作り、かつ二人の間で同じイメージへ導く方法である。確かに音楽も二人の魂の混合を促す道具であるのだが、それは、音の「震え」によって、「理知」« esprit »によって抑圧された「魂」« âme »に揺さぶりをかける道具である。そこには、揺さぶりがかけたものを方向付ける力はない。というのも、ジイドは『ショパンの覚書』のなかで、「音楽」の解釈は、小声でしか囁かれない作曲者の感情に、必死で耳を凝らして演奏しながら徐々に発見していくものであるとしており、そこには非常な困難が伴うこと、多くの演奏者がそれを成しえていないことを指摘している¹⁴からである。それに対し、「言葉」は、音楽より記号性が高く、より正確に同じ記憶を照射し得る道具であり、より同一のイメージを喚起するために、よりワルテルの抱くマニュエルのイメージとエマニュエルが自身で思い描くイメージとを合致させえると言える。

更に、「音楽」の行き過ぎた力にも「言葉」が必要な原因がある。エマニュエルの魂を揺さぶるべくワルテルがピアノを弾いた時、確かにそれは非常に効果的であったのだが、その直後に彼女はワルテルを「卑怯な行動をした」として非難する。(p. 43) 音楽はあまりにも直接的に「魂」にのみ働きかける。「理知」によって「魂」を抑制すべきと考えるエマニュエルにとって、「理知」を全く無視した方法は受け入れることができないのである。しかし、同様に、「言葉」だけでも不十分である。音楽性を伴わない、もしくは脆弱

¹³これは、『贖金使い』でボリス少年がお守りとして持っていた羊皮紙に書いてある5つの単語（「ガス、電話、十万里ーブル」(p. 328)）を思い出させる。この言葉は、ボリスと学友たちにとって、「秘密の宗礼」« pratiques clandestines » (= 「悪癖」« vice ») (p. 327)の際に使われる呪文であり、彼らにしか共有されないその言葉に込められた「魔法」« magie »によって、「現実の不在を幻覚の現存によって紛らわす」ことが可能となるものである。

¹⁴ André Gide, *Notes sur Chopin*, Gallimard, 2010, *passim*.

である「言葉」は、完全に「理知」の領分に属し、「魂」を抑圧するからである。「魂」だけを追求しても、「理知」だけを追求しても実現されない魂の混合には、「魂」と「理知」、つまり「言葉」と「音楽」を共存もしくは融合させなければならない。ワルテルが『手記』において、エマニュエルとの魂の混合の再現を図る際に、「音楽」でも「言葉」でもなく『アラン』という「音楽的エクリチュール」を要請した理由がここにあることは、ヴィットマン以下多くの研究者の認めることであるが、それは、「音楽」と「言葉」の融合が最も効果的であることをワルテルが自覚していたからである。そうであるならば、「朗読」という行為は、達成困難な「音楽的エクリチュール」の創造よりも簡単に、「音楽」と「言葉」の融合を図ることのできる方法であるが故に、エマニュエルに対してイマージュの支配を行う上で最も有効な手段とワルテルは考えていたのではないだろうか。

さて、ではその効果は如何ほどであったのか。その「朗読」が行われていた頃の二人の関係性について、ワルテルは次のように述べている。

Le grand frisson, à la fois moral et physique, qui vous secoue au spectacle des choses sublimes, et que chacun de nous croyait seul avoir, de sorte qu'il n'en parlait pas à l'autre, — quelle joie quand nous le découvrièmes l'un chez l'autre pareil : ce fut une grande émotion. Quelle source de joies, après, en lisant, de l'éprouver ensemble ; il nous semblait nous unir dans un même enthousiasme. Et ce frisson, bientôt, nous le sentîmes l'un par l'autre, l'un dans l'autre ; la main dans la main et très proches, nous nous y confondions éperdument. (p. 12)

ここではワルテルは、朗読を通して、二人が同じ「顫動」« frisson » を覚え共有していると感じ、二人が一つに溶け合う歓びに浸っている。つまり、ワルテルが意識的に「朗読」を行っていたとしたならば、その試みは成功しているのである。「朗読」は、魂の共振を求める（＝自らの理解の範疇にあることを望んでいる）女性に対して行われる時、確かにその支配を甘んじて受けさせることのできる道具であると言えるだろう。

ただし、それが可能であったのは、あくまで二人での朗読が可能であった

幼少期であり、特にエマニュエルが結婚した時点で、物理的にワルテルの「声」が届かなくなり、朗読による支配は不可能となる。よってワルテルは、新たな道具として、非常に実現困難な「音楽的エクリチュール」を模索せざるを得なくなるわけだが、この作られた物理的隔絶が、ワルテルの「声」から逃れるべくとられたエマニュエルの抵抗であると考えるのは行き過ぎであろうか。つまり、「朗読」による支配は、それを聞く相手の「魂」の共振をめざす「愛する意志」*« volonté amante¹⁵ »* (p. 27) が存在して初めて成立する行為であると言える。それは、一方的かつ暴力的に権力を揮う行為ではなく、話者の提示する支配関係に対する聴き手の協力の要請であるといえるだろう。

3. 一対多数で行われる朗読

では、親密な二人の男女の間ではなく、ある人物がする朗読を複数の人間（＝聴衆）が聴いている場合はどうであろうか。『狭き門』の中の牧師の朗読の場面に、その一例を求めることができるだろう。該当の場面は次のように描かれる。

Le pasteur Vautier, sans doute intentionnellement, avait pris pour texte de sa méditation ces paroles du Christ : *Efforcez-vous d'entrer par la porte étroite.*

Alissa se tenait à quelques places devant moi. Je voyais de profil son visage ; je la regardais fixement, avec un tel oubli de moi qu'il me semblait que j'entendais à

¹⁵ 「愛する意志」とは、『贖金使い』のなかでエドゥアールが言っている「自己拡散の反エゴイズムの力」*« force antiégoïste de décentralisation »* (p. 225) を引き起こす要件である。「自己拡散の反エゴイズムの力」とは、即ち「無意識のうちに、それぞれ相手の要求に応じておのれを作り、相手の心の中に見て取ったあの偶像に似ようと努め」、「任意の人になる為に自己から逃れる」ことによって「強烈な生命感」を味わわせる力 (p. 224-225) であるが、それは即ち『手記』のワルテルとエマニュエル、『狭き門』のジェロームとアリサの間に作用している力である。そして、エドゥアールによれば、この力は、「愛し合っている二人の存在」の間に起こる。(p. 224)

travers elle ces mots que j'écoutais éperdument.

[...]

Car étroite est la voie qui conduit à la Vie, continuait le pasteur Vautier. Et par-delà toute macération, toute tristesse, j'imaginai, je pressentais une autre joie, pure, mystique, séraphique et dont mon âme déjà s'assoiffait. Je l'imaginai, cette joie, comme un chant de violon à la fois strident et tendre, comme une flamme aiguë où le cœur d'Alissa et le mien s'épuisaient. Tous deux nous avançons, vêtus de ces vêtements blancs dont nous parlait l'Apocalypse, nous tenant par la main et regardant un même but... (pp. 820-821)

この場面で指摘しなければならないことは以下の二つである。まず、牧師の聖書の「朗読」によって、ジェロームは過去のイマージュを想起し、その幻想の中で「理知」から「魂」を脱胎させ、歓喜と恍惚を感じている点、そして、それにも拘らず、その時ジェロームの「魂」が共振し、同化していると感じている相手は、朗読者である牧師ではなく、聴衆の中の一人であるアリサであるという点である。牧師の「朗読」は、礼拝における説法であるのだから、当然聴衆にある程度の影響を及ぼす（＝権力を振るう）ことを目的に為されているものであることは疑いようがない。実際、イマージュの喚起及び「理知」の無力化、「魂」の「震え」の契機である点で、この牧師の「声」は、他者に対して一種の力を持つものである。しかしそれは、『手記』の時の様に朗読者と聴き手の関係性に寄与するものではなく、ただ聴き手を包み込む「声」＝「音」として、他者間の霊的交流を促す媒体に過ぎない。それは、『手記』の中でいうところの「音楽」と同じである。

こうした牧師の「朗読」の言語の不完全さは、まずその一対多という形式、即ちその行為が向けられる対象の分散化と一般化に依拠しているといえるだろう。「朗読」を行う際、それがあある特定の相手に向けられたものであるならば、その「言葉」の意味（＝その「言葉」が喚起するイマージュ）並びにその「言葉」による「魂」の震え方は、話者によって予め相手と共有されるように特定させておくことができ、結果相手と「魂」の共振を感じることができる。しかし、不特定多数（しかも話者が意図をもって集めた相手で

も、倫理的文脈を共有する親しい人々だけではない)相手に話すとなると、そもそもイメージの想起に必要な親密な過去の記憶を、全ての聴き手と持つことが不可能であるし、もし、そうした記憶を持った人物が聴衆にいたとしても、話者は多種多様な聴き手についてある程度考慮して話さざるをえず、使用する「言葉」に込める意味(イメージ)を一般化せざるを得ない。そうなれば、当然聴き手もそこから話者と共通のイメージを喚起しにくくなるのであり、結果、その「言葉」はもはや親密性を欠くのである。

更に、牧師とジェロームの間に「愛する意志」が存在しないことも、この「朗読」が二人の関係性に影響を齎さない要因である。愛し合う二人ではないジェロームと牧師の間には、「自己拡散の反エゴイズムの力」は働かない。

(本論註 15 参照。)それは、即ち相手と同化する感覚を持ちえない(持とうとしない)ことであり、相手の「言葉」に対して同じ過去、同じイメージを喚起したり、同じ「魂の震え」を感じたりすることの不可能性を意味している¹⁶。

最後に、ジェロームがアリサの「顔」を見ているということも関係しているであろう。ジイド作品において、「顔」を「見る」という行為が、他者との関係性を支配するうえで、誰でも行使可能で、非常に強い力を持ちえるものであることは、以前本論筆者が指摘したが、上記のような理由でその「言

¹⁶ この点に関しては、エドゥアールは、「自己拡散」のことを、「*déperson-nalisation*」(p. 245)とも呼んでおり、一方でメルロー＝ポンティも、話者の言葉が聴き手の中で生きる為には、その聴き手が「人格喪失」*« déperson-nalisation »*の萌芽をもっている存在でなくてはいけないと言っていること、(詳しくは *Maurice Merleau-Ponty, Signes, Collection Folio, Gallimard, 1960.*を参照。)更に、ジイド作品において、理解し得ない者同士、つまり「自己拡散の反エゴイズムの力」が働かない人物同士においては、相手の言葉は「隔壁の抵抗を思い知らせるボーリング機の音のように響く」(『田園交響楽』(p. 30)) だけであり、そうした人物間の会話はモノローグと化していることは、非常に示唆的である。会話のモノローグ化に関しては、以下の文献を参照。

Elaine Davis Cancalon, *Techniques et personnages dans les récits d'André Gide*, Archives des lettres modernes N°117, Minard, 1970.

葉」の有効性を削がれた「声」の権力は、非常に脆弱であり、「顔」によって構築された権力関係の中に参与することは不可能である。

以上の議論は、第一項の末尾でも述べた、「朗読」が人間関係に影響を及ぼしえる（＝他者に対して権力を持ちえる）のは、その「朗読」を聴く人物による協力が必要不可欠であるという議論の正当性を主張する。つまり、「朗読」とは、愛する二人（＝互いに互いの権力化に入ることを受容することができる二人）によって協力して行われる時にのみ、大きな力を発現する行為である。

4. 一対多数で行われる講演

さて、一方で、「愛する意志」を持つ二人の間で行われているわけでもないのに、他者に非常に大きな影響を与える「声」が存在する。それは、ある人物が大勢の聴衆に対して、「朗読」することなく、自分の言葉で自分の考えを語る講演の場面¹⁷である。それは、『鎖を解かれたプロメテ』（以下『プロメテ』）のなかのプロメテによる講演に認められる。

プロメテの講演は、非常に奇怪な様相を呈する。その論点は三つあるとされるが、第一と第二の点では論点先取がなされ、第三の点については、存在すらしない。しかも、彼は「驚を持たなければならない」と語るが、その理由を語るはずの驚は黙したままである。論点先取で始まり、論の到達点が不明であるこの演説は、何も証明せず、何の説明もされない。ただプロメテが「驚を持たなければならない」という主張だけが、狂気に近い熱情を持って繰り返されるだけである。

しかし、その結果は非常に大きな影響をコクレス及びダモクレスにもたらす。特にダモクレスにとっては、文字通り「致命的」な影響である。コクレス

¹⁷ この例に当てはまらない講演の場面もある。例えば『贖金使い』の中で、身の振り方に迷ったベルナルが「天使」に導かれて聴く国家主義者の演説の場面がそれに当たる。その演説は結局、「見る」という行為に遮られ、ベルナルに影響を与えることはない。これは、おそらく『狭き門』の牧師の「朗読」と同じような理論で説明が可能であろう。

ス及びダモクレスとは、ゼウスの「無償の行為」によって負わされた「貸し」／「借り」を、回収／清算することに窮している人物であるが、プロメテの講演後、コクレスは、債権者から献身者へと変貌する。また、ダモクレスは、ゼウスからの「借り」をコクレス相手に清算しようとした誤りに気づく。そして、本当の債権者にはまだ何も返せていないばかりか、借金の紛失と債権者の正体が不明であることで、その借金が絶対的に返済不可能であることに気づき、苦しむ。そのダモクレスの苦悩は、抵抗や反駁を許されない支配関係に還元されたことへの絶望である。また、アイデンティティーの確立には、「他者」の存在が必要不可欠であることを考えれば、自分と関係を結ぶべき「他者」（＝債権者）が不在であるということは、彼のアイデンティティーの喪失を意味し、即ちここでは彼の存在そのものが脅かされているのである。では、何故、意味をなさないプロメテの講演が、それほどまでの力を持ちえたのだろうか。その理由として以下の三つが挙げられる。

まず、プロメテの「借り」への無頓着、およびそれに体现されるプロメテの「還元不可能な差異¹⁸」性である。コクレスに対する苦痛の「借り」も、ダモクレスに対する金銭的な「借り」も、プロメテを悩ませることはない。これは、プロメテが他者との支配／被支配関係の埒外にいることを意味する。レストランで執拗にプロメテ自身について質問する二人に対して、プロメテは「驚」を持っている以外のお話をせず、結局二人はプロメテが誰なのか特定できなかった。誰であるかを特定できないということは、その人物を理解することが出来ないということである。ジイド作品において、相手を「理解」している（と思い込んでいる）人物は皆、その相手を自らが抱くイマージュの中に還元している（もしくはしようとしている）わけだが¹⁹、つまり、「理

¹⁸ Roland Barthes, *L'Empire des Signes*, Éditions du Seuil, Paris, 2007, p.15.

¹⁹ 例えば、『狭き門』のジェローム、『手記』のワルテル、『田園交響楽』の牧師は、それぞれアリサ、エマニュエル、アメリカーに対して、イマージュ支配を試みている（詳しくは、以下の拙稿を参照のこと。）が、彼らはしばしば相手に対して「完全に理解している」という言葉を使う。

森 香織、「アンドレ・ジイドにおける『顔』をめぐる闘争」、『慶應義塾大学

解」とは相手への支配権の行使可能性であると言える。バルトは、西欧世界を支配する主要概念が使用される言語に影響を受けているとし、自らの言語に変換不可能な異質な言語に触れる事と、「現実」を解体しその言語を支配する世界全体の権威を動揺させることを同値で語っている²⁰が、コクレスとダモクレスにとって、自分たちの「理解」の範囲や利害関係と無関係に、独自の法則で存在するプロメテは、正にこの「異質な言語」を体現する存在であるといえるだろう。それは、彼らのアイデンティティーや、存在動機に大きな動揺を与えうる存在である。『手記』等において、影響を受ける人物達は、「愛する意志」等によって相手の影響を受容する用意をしていたのだが、ここでは、その価値観に揺さぶりをかけることで、コクレス及びダモクレスに強制的に影響を受け得る用意をさせたと言えるだろう。

次に、その講演の論理破綻、無意味性が力を与えていると言える。A. グレは、中世における「ソチ」が、閉鎖的で「不妊」な社会の「配置転換」« *mutation* »であり、「震動の記号」« *signe de l'ébranlement* »であることを指摘した上で、ジイドが「ソチ」と名付けた作品群の執筆目的は、突発性、奇抜性、滑稽さ、無意味性によって、凝り固まった社会のあらゆる論理的思考に揺さぶりをかけることであるとしている²¹。そして、その最大の特徴を「無償の行為²²» « *action gratuite* » の存在であるとしているが、プロメテの講

フランス文学研究室紀要第 18 号』、2013 年、pp.17-32.

森 香織、「アンドレ・ジイド作品における日記の力」、『慶應義塾大学フランス文学研究室紀要第 19 号』、2014 年、pp.17-32.

²⁰ Roland Barthes, *op.cit.*, pp.15-20 *et passim*.

²¹ Alain Goulet, *André Gide : écrire pour vivre*, José Corti, 2002, pp.175-183.

²² 「無償の行為」とは、『プロメテ』の中でギャルソンによって、「何も齎さない」、「何者によっても動機づけられない行動」であり、利害や情念の一切ない、「目的のない行動」、「支配する人のいない自由な行動」と説明される。(『プロメテ』p. 472) また A. グレは、「ソチ」で描かれる社会はブルジョワ的価値観に支配されており、「無償の行為」はそうした価値観を無に帰すものであるとしている。(Alain Goulet, *op.cit.*, p. 183-197.) 更に、『プロメテ』において、ゼウスの「無償の行為」は、それまで係累がない、もしくは「最も平均的

演もまさにこの「無償の行為」の一形態であり、よって、プロメテの講演は、その非論理性の故に、周囲の論理性に揺さぶりをかけるのである。

最後に、プロメテの熱情がその講演に力を与えていると言えるだろう。ギヤルソンは、プロメテの講演が「非常に熱烈」*« très vif »*であったために、ダモクレスは納得させられたと述べている (p. 501)。ではその「熱烈さ」とは何か。我々が誰かの言説にそれを感じる時、それは声の大きさや調子、喋る速さ、そして話者の身振りや表情を介してである。つまり、「熱烈さ」の招待は、「音」の震え方と、イマージュである。特に前述の通り、論理性を欠いたプロメテの「言葉」には、「声」という音楽性が強まっており、更に花火、鷲の鳴き声、ポルノ画像という「音」とイマージュが付加される。『手記』及び『狭き門』において、「声」という音の震動が「魂」を揺さぶる為の要件であったが、プロメテの「声」も同様に、その音の振動によって「魂」を揺さぶる効果を持っていると言えるだろう。

つまり、プロメテの講演は、話者が聞き手に対して「還元不可能な差異」の体現することによって、強制的に「魂」の震動の準備をさせ、徹底的に「言葉」の「意味」を排除することによって、聞き手を共通認識という安定した地盤から引きずり出し、「音」とイマージュによって「魂」を震動させ、相手の存在を揺るがすものである。

5. 結び

以上、一対一及び一対多数の朗読の場面、そして講演の場面について見てきたが、その議論を纏めてみれば、次のような事が言えるであろう。まず、「話す」という行為に伴う「声」という音楽性は、聞き手の「魂」を動揺させるのに必要不可欠であること。そしてそれは、聞き手を「現実」から引き離し、幻想の中に逃避させたり、ある価値観が支配する世界から聞き手を無

な人間に似る」*« rassembler au plus commun des hommes »* (p. 474) ことで何物でもなかったコクレスとダモクレスを、強制的に債権者と債務者に還元し、他者との関係性の中に拘束する契機となっており、ジイドが「無償」であることは非常に大きな権力を持ちえると考えたことを証明している。

理矢理引きずり出したりする力（即ち「自己拡散」« *décentralisation* » の作用を引き起こす力）を持つということである。しかし、その拡散方向を特定し、他者を自己の理想のイメージの中に還元する（他者を自己の支配下に置く）には、特権的な過去の記憶、「魂」の共振の記憶が両者に共有されなければならない。かつ、そこに「言葉」が介在し、その「言葉」が喚起する「意味」（＝イメージ）が、その記憶によって共有されていなければならない。逆に、「意味」が徹底的に排除された「言葉」は、「音」と同じく、その影響の与え方は決定できないものの、聞き手の存在を尽く揺さぶる程の強大な力を持ち得ると言える。また、「声」という震動が「魂」を揺さぶるためには、次の2つのどちらかの条件を満たすことで、聞き手に「自己拡散」の作用を引き起こす用意がされている必要がある。即ち、両者の間に「愛する意志」が存在するか、または、話者が聞き手に対して「還元不可能な差異」を体现することで、聞き手のアイデンティティーを危機に晒すかのいずれかである。言い換えれば、「声」が権力を持ち得るためには、その意志に関わらず、聞き手の協力が必要なのである。これは、そもそも「話す」という行為自体が相手を必要とする行為であることを考えれば、当然と言えば当然である。しかし、「愛する意志」のある2人の間では、容易に使えるその道具は、逆を言えば、相手とその支配関係に抵抗を始めれば、簡単に解消され得る力でもあるということである。

こうした「話す」という行為、または「声」の権力の作品中での表出の仕方は、他者と「話す」という行為自体に影響を受けやすいジイド自身のあり方や、そのような自身とは反対に、自己の論理に凝り固まって、話し相手の「言葉」を理解しない他者のあり方について、ジイドが観察を重ねた結果であると言えるだろう。またそれは、頑なに「言葉」を理解しようとししない他者に対し、いかに自己が語る「言葉」に力を持たせ得るかについて、ジイドがした試行錯誤の跡でもあると言えるだろう。

※本論において参照した文献は以下の通りである。

『日記』については、André Gide, *Journal*, édition établie, présentée et annotée par Eric Marty,

t.I, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1997. 及び André Gide, *Journal*, édition établie, présentée et annotée par Eric Marty, t.II, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1996.を参照。

『手記』、『狭き門』、『プロメテ』については、André Gide, *Romains et Récits, Œuvres lyriques et dramatiques* Tome I, édition publiée sous la direction de Pierre Masson, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean Claude, Alain Goulet, David H. Walker et Jean-Michel Wittemann, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2009.を参照。

『田園交響楽』及び『贖金使い』については、André Gide, *Romains et Récits, Œuvres lyriques et dramatiques* Tome II, édition publiée sous la direction de Pierre Masson, avec, pour ce volume, la collaboration de Jean Claude, Céline Dhérin, Alain Goulet et Davide H. Walker, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 2009.を参照。

また本文中の括弧内のページ数は、断りの無い限り上記の版のページ数を示すものである。尚、本論の訳語については、若林真訳、『アンドレ・ジッド代表作選』、慶応大学出版、1999年の訳を元に、必要に応じて本論筆者が改訂を加えたものである。